［連載］第28回　清々しき人々

日本に野鳥観察を定着させた 中西悟堂

月尾 嘉男
（東京大学名誉教授・工学博士）

中西悟堂（1895-1984）

鑑賞の対象となった野鳥

地球には一万種近い鳥類が棲息していると推定されていますが、それらの鳥類は数百万年の人類の歴史の九九・九九%の期間は食料の対象でした。そのため絶滅した鳥類は数多く存在します。有名な事例は北米大陸東部に五〇億羽は棲息していたと推定されるリョコウバト（図1）で、美味であったことが不幸の原因となり、大量の移民が到来してから一〇〇年もたたない一九一四年に飼育されていた最後の一羽が死亡し地球から消滅しました。

それ以後も、食料の対象として絶滅していっただけではなく、人間の活動する場所の拡大によって生存する環境が破壊された結果、絶滅していった鳥類も数多く存在します。日本では学名「ニッポニア・ニッポン」という日本を象徴するような名前のトキ（図2）でさえ、一九八一年に野生では絶滅しています。国際機関の調査によれば、世界の一万種近い鳥類のうち絶滅が危惧されている種類は約一二〇〇種と全体の約一二%にもなります（図3）。

この鳥類が観察の対象に変化しはじめたのは、ヴィクトリア女王が統治し、大英帝国が世界に君臨した一九世紀後半です。国内に余裕が発生した影響で、鳥類を食料としてではなく鑑賞する意識が発生し、何人かの博物学者が野鳥の捕殺や飼育を禁止するべきという意見を表明し、一八八九年に王立鳥類保護協会が誕生しました。そして一九〇一年に『バードウオッチング』という題名の書物も出版され、人間と鳥類の新規の関係が発生しました。

アメリカでも一九世紀後半に水鳥を保護する運動が東部から展開し、一八九七年に出版された剥製の鳥類の写真を掲載した『鳥類という隣人』という書物が二五万部も購読され、その影響もあって一九〇五年に鳥類全体の保護を目的とするオーデュボン協会がニューヨークに設立されました。やや出遅れたものの、それから三〇年後の一九三四年に「日本野鳥の会」が誕生しますが、その創設の中心であった中西悟堂を今回は紹介します。

仏教の僧侶として修行

中西悟堂は一八九五年に石川県金沢市の都心の長町で父親の中西富男と母親のタイとの長男富嗣として誕生します。祖父は加賀藩士、父親は海軍軍楽隊教官という名家でしたが、父親が日清戦争での負傷が原因で富嗣が二歳の九七年に死亡し、母親は長崎の実家に帰郷してしまったため、東京在住の父親の長兄である中西元治郎（悟玄）の養子となります。この養父は自由民権運動に参加し、八八年には渡米するなど当時としては先進の人物でした。

滞在したサンフランシスコでは愛国同盟を結成、『十九世紀新聞』を発行するなど活躍し、帰国してからは仏教復興に努力した人物です。その背景には、日本から移民してキリスト教徒になる邦人が数多く存在することをアメリカで目撃し、それを憂慮したからとされています。そこで仏教を海外に紹介するとともに、自身は一九〇六年に東京上野の東漸院の住職になります。この養父の思想と経歴が富嗣の生涯に多大の影響をもたらします。

五歳で東京府麻布飯倉町にある寺子屋三栄堂から発展した小幕小学校に入学します。しかし養父の指示で僧侶となるため、一〇歳のときに秩父山中の観音寺で座行、滝行、断食などの修行をし、一二歳のときに養父と祖母とともに神代村（東京都調布市）の祇園寺に移住します。そして天台宗深大寺で得度、法名の悟堂を授与され、戸籍でも悟堂を本名とします。そして本郷駒込にある天台学林（大正大学）に入学、曹洞学林（駒澤大学）にも通学します。

一八歳になった一九一三年には愛媛の瑞応寺で修行、二五歳で島根の長楽寺の住職、二七歳で松江の普門院の住職と各地を移動しますが、その過程で次第に文学に目覚め、二一歳になった一六年に中西赤吉のペンネームで第一歌集『唱名』を刊行しますが、これは歌人で国文学者の窪田空穂に賞賛されています。さらに二七歳になったときには第一詩集『東京市』を刊行しますが、既存の詩壇と決別し、次第に作家の方向に転換を開始します。

そして元号が昭和になった三一歳のときに北多摩郡千歳村（世田谷区烏山）に移住し、そこで木食菜食生活を開始します。木食とは五穀など穀物も塩分も摂取せず、調理をする火食もせず、山菜を食材とし、さらに風呂に入浴もせず小川で沐浴するだけの生活です。これを実行した僧侶は木食上人と尊敬されますが、豊臣秀吉が帰依した応其（一五三六～一六〇八）や、全国を遊行して多数の仏像を製作した五行（一七一八～一八一〇）などが有名です。

日常はパンツ一枚で生活

現在の世田谷区烏山は建物が密集した住宅地域ですが、昭和初期は緑豊かな田園地帯でした。そのような場所で自然と一体の生活をしていたうえに、仏教に帰依していたため、虫類や鳥類を殺生することなく身近に観察する生活でした。その自然生活について有名な逸話があります。

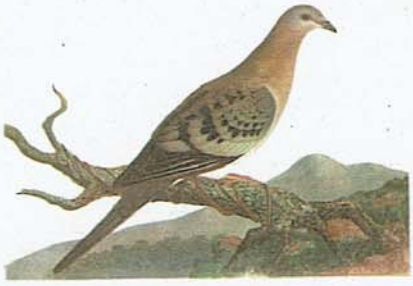


図1 リョコウバト

図2 トキ

遊行社の新刊

著者木曜レギュラー TBSラジオ系『森本毅郎スタンバイ』でも紹介。今話題の一冊！

清々しき人々

自分のためだけではなく、人々のためにも
高い理想と目標をもって生きた歴史に残る
人々、23人を紹介。
これから目指す社会のために。

月尾 嘉男［著］

・日本が東洋の英国になることを期待した教師……ヘンリー・ダイアー
・明治時代に情報社会を見通した天才……志田 林三郎
・関東大震災を警告した地震学の先駆者……今村 明恒
・日本の林学の発展に活躍した……本多 静六、他19人

四六判並製　240ページ　本体1600円（税別）ISBN 978-4-902443-44-8 C0023

遊行社（ゆぎょうしゃ）〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町5-5-1F http://yugyosya.web.fc2.com/
TEL 03-5361-3255 FAX 03-5361-1155 MAIL morgen@vesta.ocn.ne.jp

なんとなくは、生きられない。

「障害者のリアルに迫る」東大ゼミ 著
野澤 和弘 編著　本体1500円＋税

自分が何者か、誰も教えてくれなかった。

新刊

東大駒場で行われている「障害者のリアルに迫るゼミ」本、第2弾！現役東大生たちが、依存症や若年性認知症などの障害者と出会い、何を感じ、何を見たのか、自分自身を綴る。

ぶどう社　世田谷区上馬2-26-6-203
TEL03-5779-3844 FAX03-3414-3911
http://www.budousha.co.jp

朝倉書店

貴重な空撮写真や3Dイメージ、イラストを用いてビジュアルに解説

図説 日本の活断層
空撮写真で見る主要活断層帯36

岡田篤正・八木浩司 著
B5判　212頁
定価（本体4800円＋税）
オールカラー

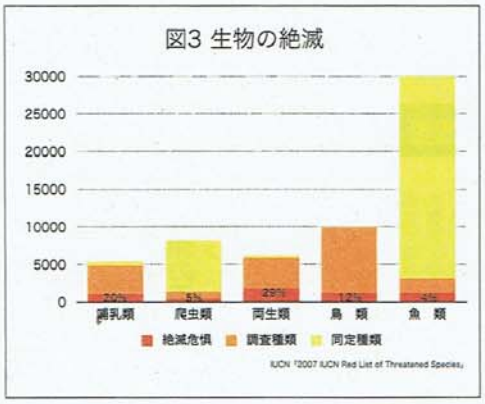
断層の運動様式や調査方法、日本の活断層の特徴なども解説。

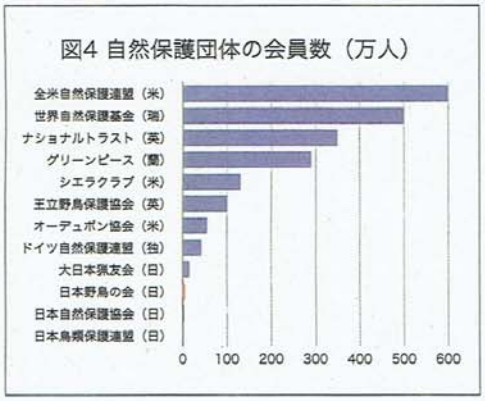
〒162-8707 新宿区新小川町6-29
TEL.03-3260-7631 FAX.03-3260-0180
http://www.asakura.co.jp

悟堂は自宅の部屋でアオダイショウやヤマカガシを放飼しており、訪問してきた郵便局長が驚嘆して町中の話題になり、奇行が評判になったことがありました。

三年半後に杉並区善福寺に移転しますが、一帯は風致地区であったため多種多様な虫類や鳥類が生息しており、ここでも自然観察に集中します。日常生活は起床すると屈伸運動をし、現代の表現では、付近を一〇キロメートルほどジョギングし、朝食はコップ三杯の冷水のみ、食事は一日二食の完全菜食主義でした。下痢などをすれば三日か四日の絶食で治癒するという、長年の木食菜食生活からすれば、ごく自然な生活でした。

この程度の習慣であれば、現在でも実行している人々もいますから奇異というほどではありませんが、さらに奇怪とされた悟堂の行動は、年中、自宅で素裸の生活をしていたことです。流石に来客など外部の人間が訪問してきたときは、季節に関係なく簡素な単衣の着物を着用して応対していましたが、日常生活はパンツ一枚で、執筆も書斎を使用せず、雨天でもなければ屋外に座卓を設置し、パンツ一枚のみで仕事をしていました。





さらに野鳥の観察などで山歩きをするときもパンツ一枚だったそうです。夏山では低地では直射日光が強烈のため襦袢を着用しますが、二〇〇〇メートル以上の高地になると気温が低下するので、再度、パンツ一枚になって登山し、冬山でも同様でした。さらに子供時代の修験の修行や青年時代の木食生活の粗食の体験などから、何日も飲食せずに登山をするのも平気で、日本の野山の自然環境や生息する動物に精通していきました。

「日本野鳥の会」を創設

そのような体験の結果、三九歳になった一九三四年三月に中西悟堂を会長に、鳥類学者の黒田長礼、詩人の北原白秋、国文学者の窪田空穂、民俗学者の柳田国男などが中心になり、「日本野鳥の会」が創設され、五月には雑誌『野鳥』が創刊されます。当時の日本ではウグイスを飼育して美声を競争するとか、野鳥を捕獲して食料にするということが一般でしたから、鳥類を愛護し、研究を推進するという組織の出現は革命でした。

鳥類を研究する活動は二年前の一九三二年に皇族出身の鳥類学者山階芳麿が私費で創設した山階鳥類研究所が存在していましたが、一般の人々の野鳥観察を推進する組織は欧米より約三〇年出遅れましたものの、日本でも自然保護という概念が登場してきたことを象徴しています。野鳥という言葉は悟堂が発明しましたが、「日本野鳥の会」創設の翌年、悟堂が執筆した『野鳥と共に』が文部省推薦図書となり、世間に定着してきました。

当初、会員は鳥類学者、民俗学者、貴族などに限定されていましたが、次第に一般の参加も増加し、全国各地に支部も誕生して一九四四年には会員が約一八〇〇人になり、現在では八九の支部と約五万人の会員により構成されています。しかし、イギリスの王立野鳥保護協会の約一〇〇万人、アメリカのオーデュボン協会の五六万人と比較すると、創設からの時間の長短だけではなく、日本の自然保護への関心が未熟であることを実感します（図4）。

自然保護への貢献

しかし悟堂自身は自然保護に数多くの貢献をし、石川、富山、福井、岐阜の四県に展開する白山国定公園を国立公園に昇格させることを石川県知事から依頼されたときには、すでに還暦となった一九五五年に一帯の動物、植物、地質の調査を実施し、その調査結果により、一九六二年に国立公園に昇格しています。また、冒頭にも紹介したトキの絶滅が話題になったときには、六四歳にもかかわらず能登半島での分布調査に参加しています。

悟堂が会長である「日本野鳥の会」としては、さらに数多くの貢献があります。一九六三年には従来の日本の野生動物への見方から『狩猟法』とされていた法律を『鳥獣保護法』に改正し、八一年には北海道の千歳空港の付近にあるウトナイ湖を直営のサンクチュアリ（自然保護地域）にし、これも北海道で一七年間も論争のあった千歳川放水路計画を中止にする活動にも貢献しています。このように悟堂の意思は継承されてきました。

最後まで自然保護に活躍

悟堂が生活していた杉並区善福寺は戦争末期の一九四四年に軍部が占拠して森林を伐採したため、多摩川沿いの福生に土地を借用して移転しますが、翌年になると空襲の不安も増大してきました。その時期の心境を「この戦／はや詮なきを／新聞の／戦火の白書／なほしらじらし」と吐露しています。そこで山形の蔵王山麓に疎開しますが、終戦になって帰京してみると、借地は軍部が占拠しており、仕方なく対岸の秋川市の農家に移住し、一九五四年までそこで生活しました。

「野鳥友の会」発足と同時に発刊した雑誌『野鳥』は用紙の配給統制から一九四四年に廃刊となりますが、戦後の四七年に再刊されますが、それとともに悟堂は全国を巡回して野鳥保護運動を推進し、さらに自然保護に活動を発展させ、それらの貢献により、八二歳になった七七年には文化功労者として顕彰されています。肝臓ガンにより八九歳で死去しますが、波乱万丈の人生にもかかわらず、一貫して日本の環境保護に多大の貢献をした人生でした。

つきお よしお
1942年生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002-03年総務省総務審議官。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースキーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、信越仰山塾、瀬戸内海塾などを主宰し、地域の有志とともに環境保護や地域振興に取り組む。
主要著書に『日本 百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』『水の話』『先住民族の叡智』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『誰も言わなかった！本当は恐いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本地域創成の展望』（東京大学出版会）など。最新刊は『清々しき人々』（遊行社）。

教育シンポジウム
グローバル社会における多言語の可能性

国際化やAI（人工知能）の革新により、社会環境が大きく変革している現在、日本も多文化・多言語の世界へと変化してきています。
訪日観光客も急激に拡がり、日本の企業でも様々な国籍の方が働き、学校や地域にも様々な家庭環境を持った子どもたちがいる状況が生まれています。このような社会で、「ことば」の教育はいったいどのように取り組めばいいのでしょうか？
このシンポジウムでは、言語学、言語脳科学、学校での外国語教育、専門家の方々に加え、家庭で取り組んでいる「多言語活動」など、実際に活動されている方にもお話をしていただき、ことばの教育や多言語の取り組みについて、一緒に考える場にしたいと思います。
「ことば」や「多言語」、「外国語教育」に関心のある方、教員や専門職の方をはじめ、広く一般の方など多くの皆様のご来場を心よりお待ちしております。

2019年
3月13日（水）19:00～21:00
参加費：おひとり1,000円 学生500円 定員：250名
会場：アルカディア市ケ谷（私学会館）
地下鉄有楽町線・南北線・新宿線 市ケ谷駅（A1またはA4）出口から徒歩2分、JR中央線（各駅停車） 市ケ谷駅から徒歩2分

プログラム
◆基調講演
「人間の言語能力は無限」
スザンヌ・フリン（マサチューセッツ工科大学教授／多言語獲得研究）
◆各界の専門家による研究および事例報告
・酒井邦嘉（東京大学大学院総合文化研究科教授）
・大和田康之（レッドランズ大学名誉教授／EngageAsia財団理事）
・森田明彦（尚絅学院大学現代社会学科教授）
・鈴木堅史（言語交流研究所代表理事） 他、教育現場に携わる教員の方など

申込方法 右記の申込フォームからお申し込みください 申込締切 3月5日（火） 定員に達し次第締め切らせていただきます
申込先 一般財団法人 言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ
〒150-0002東京都渋谷区渋谷2-2-10青山H&Aビル3F フリーダイヤル 0120-557-761
主催：一般財団法人 言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ
参加申込URL
https://goo.gl/2ZrGNB